

「さて。じゃあ、まずはこの硬くなってしまったおっぱいの芯を、オイルで解きほぐして  
いこうか」

瀬名さんは、掌で温めたオイルを、僕の胸元へとゆっくり垂らした。

熱すぎず、ぬるい独特の温度の液体が、乳輪へととろりと流れ落ちる。

「ひっ……あ、熱い……♡」

「いい温度でしょう？ ローションとは違う、オーガニックの高級オイルなんだ。肌馴染み  
がいいから、中までじっくり浸透してくれるよ」

瀬名さんの両手が、ぺたっと僕の胸に置かれた。

掌全体で円を描くように、大きな動きで胸全体をマッサージしていく。

ヌルッ、ヌルッ。

最初は硬い筋肉をほぐすような動き。

けれど、彼の指先が乳輪のキワに触れるたび、その動きは執拗に、ねっとりとしたもの  
へと変わっていく。

「千尋くん。おっぱいの先端、僕の手ひらに当たってるよ。自分でもわかる？ 中でピク  
ピク、出たがってるのが」

「ん、あ……っ。わ、かんない、です。……ただ、変な、感じで……♡」

「それは、身体が施術を喜んでいる証拠だよ」

瀬名さんがオイルでテラテラに光る僕のおっぱいを、親指と人差し指でそっと挟み込ん  
だ。

乳首は全然外には出ていない。

皮下に隠れたままの、一番敏感な先端を、オイル越しにコリコリと弄り始める。

「あ、は……っ♡ やだ、そこ、は……っ♡♡♡」

「ダメだよ、逃げちゃ。……ほら、見て。千尋くんが鳴くたびに、股間のタオルが今にも  
落ちそうだよ？」

瀬名さんの視線が、僕の胸から下へと移動する。

羞恥心で身体が跳ねるたび、頼りないハンドタオルが今にも滑り落ちそうになり、僕は  
必死で足を閉じた。

「……ひ、あ……んっ♡♡♡」

瀬名さんの指が、オイルを含んで柔らかくなった僕の胸を、こねるようにマッサージし  
続ける。

ヌチャ、クチュと、静かな個室に卑猥な音が響く。

「ねえ、千尋くん。さっき初エッチだったのになって言ってたけど……。結局、最後までで  
きなかったの？」

瀬名さんの手がピタッと止まり、僕の顔を覗き込む。

僕は顔を真っ赤にして、視線を泳がせた。

「……っ、はい。……彼が、その。僕のここを見て、固まっちゃって。……そのまま、気まずくなって」

「ふーん。じゃあ、千尋くんはまだこの体は、誰にも許してないんだ」

瀬名さんの指先が、僕の鎖骨から喉元へと、オイルの跡をなぞるように滑り上がってきた。

トク、トクと、僕の早鐘を打つ鼓動が、彼の指に伝わっているのがわかる。

「かわいそうに。一番大好きな彼に、初めてを全部捧げるつもりだったのにね。でも、よかった。彼、何もわかってないみたいだから」

「え……？」

「だって、こんなに可愛くて、感度がよくて、僕がちょっと指を滑らせただけで、股間のタオルを今にも跳ね飛ばしそうにしてるこんな敏感過ぎる身体、普通の男には扱い切れないよ」

瀬名さんは再び胸元に手を戻すと、今度は親指の腹で、陥没した部分の縁をグイグイと押し広げるように圧をかけた。

「ねえ、千尋くん。彼氏さん、ここ、口で吸ってくれた？ それとも、汚いものみたいに指で触れただけ？」

「あ、は……っ。そ、そんなこと、聞かないで、ください……っ」

「いいから答えて。これは、治療に必要なことだから。ねえ、彼氏さんはここを可愛がってくれたの？」

「……っ、ううん。……ち、ちょっと触って、すぐに、手を離しちゃった、です。……っ、あ、んあぁっ♡」

瀬名さんの指が、オイルの滑りを利用して、くぼみの奥へと強引に割り込んできた。

彼氏への申し訳なさと、瀬名さんの指がもたらす初めての快感。

僕は、股間のハンドタオルを握りしめることしかできなかった。

「じゃあ千尋くん、準備運動は終わり。ここから、少しだけ刺激を強くしていくね」

瀬名さんはそう言うと、オイルを拭き取った指先で、僕の乳輪のキワをぐっと力強く押さえつけた。

「……あ、っ！ せな、さん……？」

「大丈夫。これはホフマン・テクニックという、陥没乳頭を改善するための専門的な手技なんだよ。こうやって、根元を外側に押し広げていくんだ。中の癒着を剥がして、隠れている部分を引き出しやすくするためにね」

瀬名さんの両手の親指が、僕の胸のくぼみを左右に、引き裂くような勢いで広げていく。

ミリミリ、と皮膚が突っ張る鈍い痛み。

けれど、その痛みがコンプレックスの核心に届くたび、脳の奥が痺れるような、熱い火花が散った。

「っ、うあ……いた、い、です……っ、そんなに、強く……！」

「ごめんね。でも、これくらいしないと、おっぱいの先って出てきてくれないから。ほら、千尋くんも見てごらん」

瀬名さんの指が、内側からグイと何かを押し上げる。

すると、あんなに頑固に中に潜り込んでいた僕の乳首の先端が、真っ赤に充血して、不格好にひょこりと顔を出した。

「あ……あぁっ♡」

初めて、外の世界に剥き出しにされた僕の中身。

外の空気に触れた瞬間、そこは自分でも驚くほど硬く尖って、瀬名さんの指の間に挟まれていた。

「千尋くんのおっぱい。やっとお顔を見せてくれたね。こんなに綺麗な色をして、ずっと隠れていたんだ。頑張って出てきたご褒美に、この恥ずかしがり屋のおっぱいはたっぷり可愛がってあげないと」

瀬名さんは、引き出したばかりの僕の敏感な先端を、人差し指と親指でコリコリと弄り始めた。

「あ……っ♡」

声が出るたび、瀬名さんの指が、わざとらしく止まる。

「今の反応、ちゃんと覚えておこうね」

そう言って、またコリ、と同じ場所を押す。

今度は、ほんの一瞬だけ長く。

「うん。柔らかさも、戻り方も、すごく素直」

褒められているはずなのに、まるで弱点を一つずつ書き留められているみたいで、僕は落ち着かなくなる。

指先が、円を描くように動いた。

「焦らなくていいよ。コリコリされるの、まだ慣れてないでしょ。大丈夫。今はね、外に出てきたご挨拶をしているだけだから」

コリ、コリ。

規則正しく繰り返される刺激に、身体が勝手に覚え始める。

「ほら。もう、さっきより身体が逃げなくなってる」

囁きと同時に、指の圧がほんの少しだけ強くなった。

「いい子だね。ちゃんと、触られる準備ができています。……ね。ここ、好きだね」

人差し指と親指で、つまんでコリ。

少し間を置いて、またコリコリ。

思わず息を詰めると、今度は、わざとゆっくり。

コ……リ。

「……あん♡」

逃げようとするたび、追いかけて、コリコリ。

忘れたふりをすると、念押しみたいに、コリ、コリ、コリ。

「ん……あ……♡ だ、め……そんな……♡」

否定しているくせに、語尾が勝手に震えて、甘くなる。

そして、連続のコリコリ攻めが急に始まった。

コリコリコリコリ。

「……あ、そこ……っ♡ は……あ……♡ ん、う……」

コリコリコリコリコリコリコリコリ。

気が狂いそう。

ようやく露出した乳首を摘まれて、右に左に、コリッ、コリッ。

それがずっと。

「ひ、あ、っ♡ あ、だめ、そこ、は……っ♡、んんんっ♡♡」

「ダメじゃないよ。せっかく出てきたんだから、この感触を覚え込ませないと。ほら、自分でも見てごらん。君のおっぱい、こんなに立派に勃ってるよ？」

僕の視界には、瀬名さんの白い指先に弄ばれ、見たこともないほど赤く腫れ上がった自分の身体が映っていた。

さらに目が奥へ。

乳首が痛くて恥ずかしいのに、股間のハンドタオルがもう、限界を隠しきれずに跳ね上がっている。

「彼氏さん、きっと驚くよ。こんなに感じやすい身体に変わっちゃった君を見たら」

「本当ですか？」

僕は泣き出しそうになってしまった。

「千尋くんは、こんなにも努力している。絶対に報われるよ」

痛みも、恥ずかしさも、全部この人の言う通りに耐えれば、またあの人と笑い合える日が来る。そう思ったら、堪えていた涙がついにポロポロと溢れ出した。

「う、う……っ、はい。……僕、頑張ります。彼に、嫌われないように、なりたいんです……っ」

「いい子だ。でも、泣き虫さんだね。ほら、涙を拭いて。せっかく可愛く咲き始めたおっぱいも涙のせいで枯れちゃうよ」

瀬名さんは僕の頬を親指で優しく撫でてくれた。

「あは、可愛い。ねえ、千尋くん。一つだけ教えて。彼氏さんは、君がこんな風に可愛く泣きじゃくる姿、見たことあるの？」

僕は首を横に振った。

彼氏の前では、いつも普通でいようと必死だった。情けないところを見せたら、余計に引かれてしまうと思っていたから。

「そっか。じゃあ、千尋くんのこんなに乱れた姿を知っているのは、僕が初なんだね」

瀬名さんの声が、一瞬だけ低く、熱を持った気がした。

「じゃあ、ホフマンテクニックの続きいくよ」

「ひ、あ、っ！ あ、だめ、そこ、は……っ、んんんっ！」

瀬名さんの指先が、僕の敏感な先端を容赦なく弾き、擦り上げる。

引きずり出されたばかりの皮膚は、産まれたての赤ん坊のように薄く、ただ空気に触れるだけでも痛いほどなのに。そこに瀬名さんの、少し硬くて温かい指の腹が、ミリ単位の精度で「一番感じるところ」を逃さず責めてくる。

「……っ、ふ、あ……あ♡ ああああっ♡♡」

あまりの刺激に視界がチカチカと点滅し、目尻からボロボロと涙が溢れ出した。

「おや、今度は別の種類の涙かな？ 痛かった？ それとも気持ちよすぎた？」

瀬名さんは手を止めてくれない。それどころか、胸を弄る指の動きをさらに速めた。

「い、や……っ♡ もう、やめて、ください……っ♡ おかしく、なっちゃう……っ♡♡」